

アジア在住ヨーロッパ人の生活様式の変容とヴェランダ式住宅の誕生

泉 田 英 雄*

Changing European Life Style in Asia and the Birth of the Verandah House

Hideo IZUMIDA*

When foreign merchants settled in the treaty ports of China and Japan in the nineteenth century, they constructed houses entirely surrounded by verandahs. This type of building, which may be called the verandah house, was the most popular house-type among Europeans living in tropical Asia. As the verandah house did not originate in Europe, it must have been created in colonial Asia by European colonists as they adjusted their life-style to the colonial environment.

This article argues a relationship between the changing European life-style in the colonial environment and the birth of the verandah house, using historical documents and drawings. It concludes that the verandah house was probably first devised in the frontiers—areas remote from the colonial centers—such as plantations, resorts, or military bases, where it was hard to find people skilled in European building techniques and to acquire the necessary materials. Although in the early stage of development, such a house-type was scorned by European newcomers and intellectuals, it was accepted widely by colonial society, where people sought comfort by employing many servants.

はじめに

幕末から明治初期にかけて日本に存在した外国人居留地には、外側をヴェランダ(verandah)¹⁾で取り囲まれた建物が多数建っていた。ヴェランダとは現在の建築用語としては、屋根と床によって囲まれている建物側面部分を指し、壁や窓で閉鎖されることもある。通路としてだけでなく、半屋外の生活空間(喫茶, 食事, 接客など)として使われるので、

* 豊橋科学技術大学; Toyohashi University of Technology, 1-1, Hibarigaoka, Tenpaku-cho, Toyohashi, Aichi 441, Japan

1) 語源について述べると、ヨーロッパ諸語やインド諸語の古典文献では完全形での使用例は見いだされず、ポルトガルのアジア進出とともに彼らの記録の中で使用されるようになったといわれる。これまで多数の言語学者がサンスクリット語源説、ポルトガル語源説、ペルシャ語源説、インド・ローマ祖語源説などを主張してきたが、どれも決定的なものではない。ポルトガル語文献の初見は、『ドン・バスコ・ダ・ガマのインド航海記』の中で「司令官は大きな真鍮の燭台が照らしている露台(varanda)に集まっていたわれわれのもとへ帰ってきた」で、その後パロスの著した『アジア史』の中では頻繁に使われている[Yule and Burnell 1886]。

最低限そのための幅員が必要である。典型例として長崎山手のグラバー邸²⁾があげられる。

グラバー邸は、英語でサンスクリットないしヒンディー語源のバンガロー (bungalow)³⁾ と称されたように、もともと西洋にはなかった建築形式である。これを本稿では、その特徴をより明確にするためにヴェランダ式住宅と呼ぶことにする。グラバー邸はグラバーの東アジアでの活動とともに、中国南部沿岸の外国植民地や外国居留地での経験を媒介として日本に伝えられたのであろう。

実際、1850年代の東アジアに多数のヴェランダ式住宅があったことは古絵図から確認できる [Orange 1924]。シンガポールでも、19世紀半ばこの住宅形式が郊外丘陵部一帯を占めていたといわれ [Cameron 1865: 52-53]、遅くとも19世紀半ばにはアジアに居住する西洋人の一般的住宅形式になっていたのであろう。ただ、シンガポールにおける西洋人の本格的居住は1819年以降、マカオを除く中国南部におけるそれは1841年の南京条約以降のことであり、この数十年という短期間で新しい住宅形式が東アジアの外国人居住地内に成立したとは考えにくい。むしろ、アジアの中で西洋人の居住期間の長かったジャワやインドにおいて、ヴェランダ式住宅がすでに西洋人の一般的住宅形式として確立しており、1819年のイギリスによるシンガポール建設をはじめとして、その後の西欧諸国の東方進出とともに東アジアに一気に広まったものと考えられる。

本稿では、ヴェランダ式住居をはじめとして16世紀から19世紀前半までに西洋人がアジアで暮らしてきた住宅形式を類型化し、それぞれが彼らの生活様式とどのような関係にあったのか考察してみたい。関連既往研究として、アンソニー・キングの『バンガロー：地球文化の創造』 [King 1984] がある。キングは本書の中で、ヴェランダの起源論をいくつか紹介し、のち18世紀半ばインド在住のイギリス人たちが現地民家形式をモデルにして外周にヴェランダを巡らし、全体に傾斜の緩い大屋根をかけて作り出したものだと結論づけている。彼が述べているように、19世紀初頭、バンガローという言葉がイギリス人によってインドからヨーロッパに伝えられ、さらに19世紀半ばにアメリカ大陸まで広まったことは確かである。⁴⁾ しかし実際に作られたものは、ヴェランダ形式という東洋趣味の一種であったり、簡素な建物の代名詞であり、決まった形態があるわけではなかった。さらに、イギリス人がインドで作りに出したというキングの起源論は、西洋人としてアジア居住がより長かったジャワのオランダ人を無視している。本稿では、検討のための資料が不足している起源論よりも、住宅形式の経時的変化を広い

2) グラバー邸は1863年に日本人大工によって建設され、現在国有文化財に指定されている。施主のトーマス・グラバー (1840-1889) は、兄弟らとともに1859年に上海経由で日本にやってきたもので、長崎で東アジア最大の商会であったジャーデン・マセソン商会の代理人を勤めていた。

3) バンガロー (bungalow) については後述。

4) 中産階級の出現とともに、それまでのカントリーハウスのような大型住宅ではない小型の一戸建て住宅が求められ、バンガローは19世紀後半アメリカ合衆国で独自の展開を遂げ [Lancaster 1985]、さらに20世紀初頭にはアメリカ合衆国から日本に伝えられた [内田 1992]。

範囲で眺め、アジアの植民地や居住地で西洋人が作り出した住宅形式を、彼らのアジアでの生活様式との関係で明らかにしてみたい。

I 都市住宅

I-1 ポルトガル人居住地の後庭式街屋

16世紀以降ヨーロッパ人として最初に集団でアジアに居住したのはポルトガル人である。彼らの最大の居住地はゴアで、アルブケルケは1510年にここを征服すると、古代ローマの植民都市⁵⁾の建設に範をとって兵士たちに現地女性との結婚を勧めた。また土地と住宅を分け与え、市民として定住させようとした。さらに、定住市民の中から能力の優れた者を選び出し、市参事会、判事、典獄などの市の統治のための官職を割り当てていった [バロス 1980: Vol. I, 501]。1512年には周囲に長大な城壁と堡壘が完成し、市内の街並みも出来ていったが、ゴアの都市形態そのものは古代ローマ帝国の植民都市プランとは異なるものであった。

1580年代当地に滞在したリンスホーテンは、ゴアがリスボンと同じように丘陵部に横たわっていると述べ [リンスホーテン 1968: 280]、またナヴァレッティも中心市街地の人口密度の高さや、道の湾曲と上がり下がり多さに不平不満を述べているように [Navaarrete 1732: 260-261]、ゴアは当時のリスボンによく似てヨーロッパ中世都市の面影を色濃く残していた。同様な居住地形態は、ポルトガル支配のマラッカやマカオでも見いだすことができる。一般にポルトガル人たちのアジア居住地の特徴は、次のようにまとめられる。第一に防衛と港湾機能を重視したので、背後に小高い丘が控えた島や半島が選ばれ、第二にこうした土地は平地が少なかったために居住地は斜面に築かれることになり、街路は湾曲した不規則な配置となった。

居住地形態だけではなく、住宅形態もポルトガルは自国のものをそのままアジアに持ち込んだようである。「ポルトガル人及びメスチーゾのキリスト教徒らは、実に堂々とした邸宅を構えて」、「みな奴隷にかしずかれて重々しく」日常生活を送っていた。彼らの住宅について、リンスホーテンは「住宅もポルトガル風に立派に建設されているが、住宅は炎暑のためにやや低めに建ててある。住宅の後ろにはたいていどこにも庭園や果樹園があり、種々様々なインディアの果樹が一杯である」 [リンスホーテン 1968: 280] と、述べている。

古絵図(図1-1)からもこのことは確かめられ、街路に面して二階建ての煉瓦造の建物が連続していたことが分かり、ファサード (facade)⁶⁾ の鑄鉄製バルコニーとボンネット型屋根⁷⁾が

5) 本稿では本国からの移民者を住まわせることを前提として作られるものを植民都市と呼び、もっぱら現地住民を政治支配するためのものを植民地都市と区別する。

6) ファサード (facade) とは建物の正面部分を指し、西洋古典建築では建物の表情となるためさまざまな装飾が付け加えられる。

7) ボンネット屋根とは、鍔が回った帽子のように、傾斜の少しい中央部分と緩い周囲部分から成っている屋根を指す。

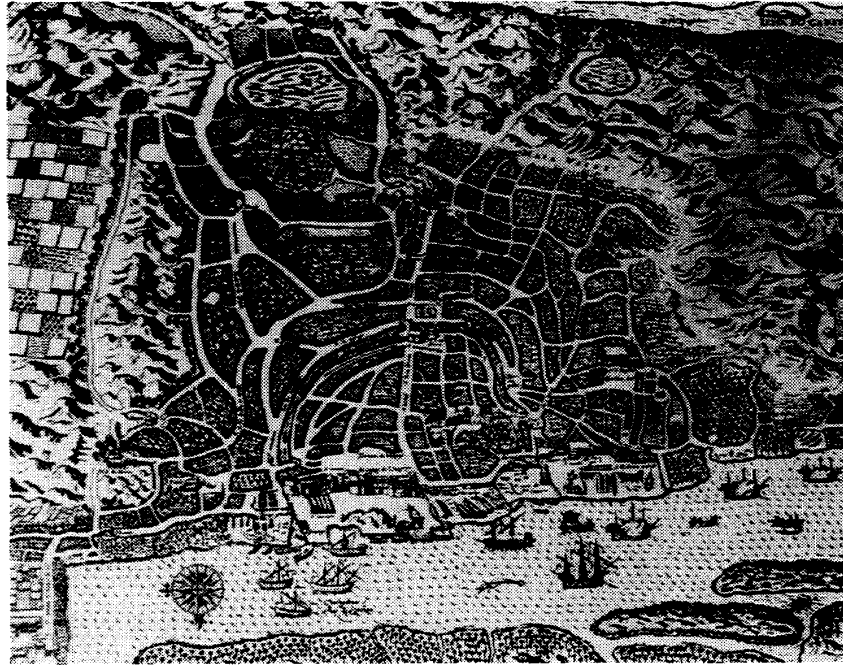


図1-1 16世紀末のゴア

出所：リンスホーテン [1968]



図1-2 16世紀末のゴアの住宅の後庭

出所：リンスホーテン [1968]

特徴的であった。また古地図から、このような建物が街路に連続し、内部に空き地が形成されていたことがわかる。その空き地は小さく区切られ、各戸の庭園や果樹園となっていた。そして、男性たちは「いつもシャツから腹をむき出しにして露台の椅子にふんぞり返り、奴隷の一

人には足、爪先を揉ませ、一人には頭をさすらせ、もう一人には団扇で蠅を追わせながら涼を取る。こうして午後の数時間を昼寝をして過ごすのが彼らの一般の習慣で、喉が渴けばそのつど、好物の砂糖漬けとか砂糖煮の果物などを皿に山盛りにしては運ばせる」[同上書:340] のであった。住宅の外観はポルトガル風に作られ、内部には後庭に面して大きな露台があり、そこが熱帯で快適に生活するための重要な空間であったことが分かる（図1-2）。

露台は、リンスホーテンのオランダ語原文の記述ではギャラリー（galerij）⁸⁾ と綴られており、すでに古代ローマ時代に用いられていた。これはコロネード（colonnade）⁹⁾ 或いはアーケード（arcade）¹⁰⁾ で開放された半屋外の空間で、おそらく南欧の土着的な建築要素として地域によって呼び方が異なっていたのであろう。露台はポルトガル語ではヴェランダと呼ばれているが、その語源は不明である。この言葉はポルトガル語文献の中ではバスコ・ダ・ガマの『インド航海記』が最初の使用例と言われ、インド諸語から借用した可能性があるが、しかしインド諸語古典文献の中には使用例はないようである [Yule and Burnell 1886]。南欧に同じような意味を持つロτζィア（loggia）¹¹⁾ やパティオ（patio）¹²⁾ という言葉が見られるように、ポルトガル人がアジアに進出してくる以前、おそらく彼らの建物の一部にヴェランダと称する何らかの空間があったと思われる。

このようにポルトガル人たちは居住地を城壁で囲んで守ると、城内でできるだけ快適に過ごすために、住宅内部に後庭とそれに面するヴェランダを大きく発展させた。彼らは、後にやってくるオランダやイギリスに比べると西洋人の中でも暑い地域の出身であり、またイスラムとの接触があったため、このような熱帯・亜熱帯乾燥地帯に適応した住宅形式をアジアの居住地で作り出すことはそう難しいことではなかったのであろう。しかし、露台で涼むことはできても、退屈な時間の気晴らしにはならず、リンスホーテンがゴアを訪れた16世紀末にはすでに郊外にいくつかの行楽地ができていた。

I-2 オランダ人居住地の職員専用街屋

オランダの海外居住地は、ジャワのバタヴィア（Batavia, 現ジャカルタ）、台湾のゼーラン

8) ギャラリー（galerij）は、英語で gallery と綴られ、語源はラテン語。オランダ語にはフランス語から伝えられた。もともと建物に沿って作られた細長い廊下をさしていたが、その壁に絵画を飾ることが多くなると画廊という意味を持つようになった。

9) コロネード（colonnade）とは円柱を連続して並べたものをさし、内側には細長い廊下ができる。

10) アーケード（arcade）とはアーチの連続をさし、アーチの内側に煉瓦を詰めて壁にしたものを閉鎖式、開けたものを開放式と呼ぶ。開放式の場合には、コロネードと同じように内側に廊下ができる。

11) ロτζィア（loggia）はイタリア建築にあって庭園を望む位置に設けられた廊下。コロネードで支えられ、半屋外の生活空間として使われる。

12) パティオ（patio）も庭に面して設けられた半屋外の空間で、食事や喫茶のために用いられる。



図1-3 1620年代末のバタヴィア

出所: Breuning [1981]

ディア (Zeelandia, 現台南), インドのマスリパタム (Masulipatam) やプリカット (Pulicat) に見られるように, ポルトガルのもので地形的特徴はなく, ほとんど平坦な河口に開かれた。オランダの海外大規模居住地であったバタヴィアも, ジャワ島北海岸のチリウォン (Ciliwung) 川河口の低湿地に位置し, アムステルダムのように運河を掘って居住地の造成が行なわれた [Breuning 1981: 23-27] (図1-3)。この都市は1619年オランダ東インド会社総督J.P. クーン (Jan Pieterszoon Coen) によって建設され, 彼は始めオランダ本国で入植者を募って東インドに定住させようと考えていた。バタヴィアに本国から大工, 煉瓦工, 石工, 金物屋, 鍛冶屋, 塗装屋, 金細工師など様々な職人と労働者を呼び寄せ, 防衛, 行政及び職員居住のための施設の建設に当たらせた [永積 1982: 67-68]。このようにして東インド会社によって一気に建設され, 職員に貸し出され, そして修理営繕されていった住宅をP.D. ミローンは「割り当て

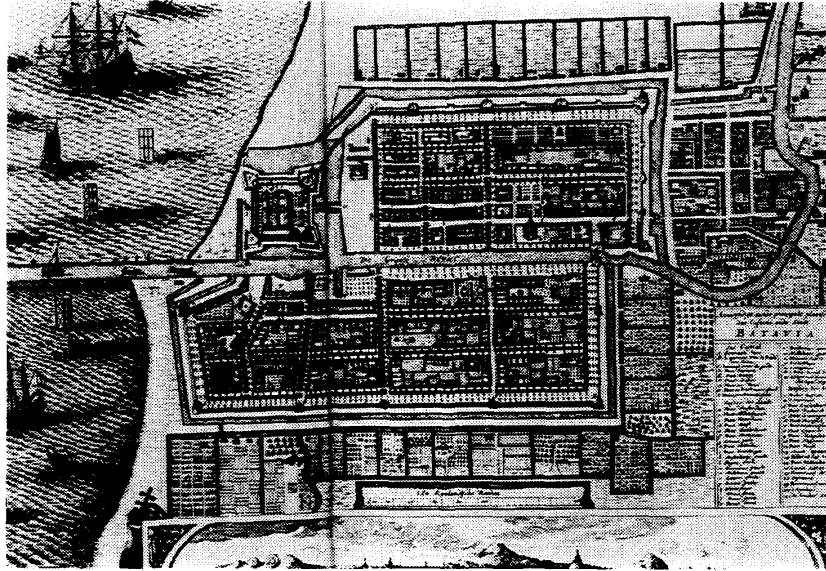


図1-4 1650年代のバタヴィア

出所：Haan [1922]

住宅あるいは分譲住宅 (allocated or entitled housing) [Milone 1985] と呼んだ。

この住宅の姿は当時のオランダ人の記述や絵図から知ることができ、1660年代J. ニューホフはバタヴィアの街並みを「この都市の街路はまっすぐに走っており、ほとんどが30フィートの幅で、家屋に沿った両側は煉瓦で舗装されている。全部で八本の街路があるが、それらは全てよくできており、またたくさんの人が住んでいる。中心となるのはプリンセス街で、城塞入り口から市庁舎まで続いている。もう一つは城塞の北側から始まり、新しい門まで伸びている」 [Nieuhof 1682:266] と述べている。1650年代の古地図(図1-4)によれば、すでに運河と街路が格子状に配置され、その街路に沿って連続して建物が完成していた。さらに、具体的な街並みについてはラッハの図版 [Loos-Haaxman 1928] から知ることができる。右手前の建物は煉瓦造の壁にプラスター¹³⁾を塗り、いまだサッシ、ガラス、錠戸¹⁴⁾はなく、当時の本国の風景画家たちが描いたオランダの街屋と同じものであった。

このように城内の建物は街路に沿って一気に建設された連続式街屋で、長方形の街区割りに対応して奥行きが非常に短かった。そのため街路に沿って一棟連続するだけで、奥は空き地となるか、物置が作られるぐらいで、後庭や中庭といえるほどの空間はなかった(図1-5)。18世紀半ばJ. ラッハ (Johannes Rach) が描いた絵によれば、わずかながら街路に面する窓が大きくなり、軒の出が深くなっていったが、経時的变化は僅かであった。この建物の中でオラン

13) プラスター (plaster) とは砂混じりの漆喰で、ラテン語ではスタッコ (stucco) とも呼ばれる。

14) 錠戸とは、日差しを避けるためにルーバー (がらり) の付いた両開き窓をさし、英語ではヴェネチアン・ウィンドウ (Venetian window) と呼ばれる。

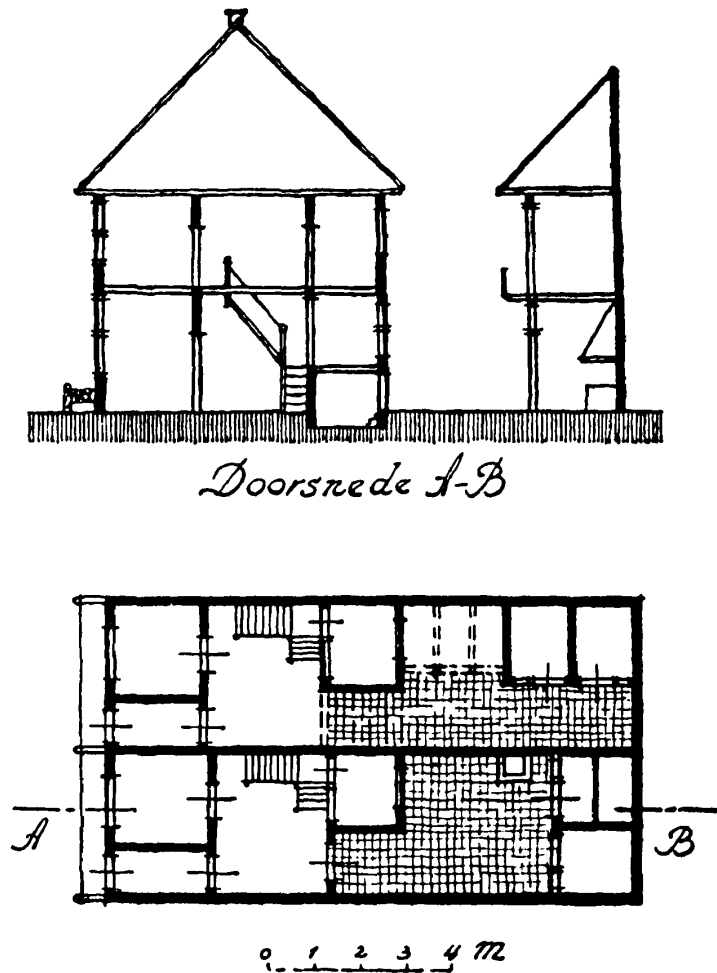


図1-5 17世紀初頭のバタヴィアの職員住宅

出所: Breuning [1981]

ダ人たちは、海風にあたると病気になると信じて窓を閉め切っていたというから [Haan 1922: Vol. I, 433], さぞ室内は蒸し暑かったに違いない。多くの死亡者を出しながら、バタヴィア城内の住宅が熱帯モンスーンの気候風土に順応しなかったのは、第一にオランダ人居住者の多くが長くても数年しか滞在しない単身の会社職員であったことが影響していると考えられる。第二は、オランダ東インド会社にとってバタヴィアはオランダ海外発展の誇りであり、歴代総督たちは会社の威信を懸けてその美しい街並みを維持しようとしたためであろう [Greig 1987: 196]。運河を含むこの街並みを維持管理するには多大の費用がかかり、政庁の財政はしだいに逼迫した。またオランダ人以外の住民が増加してくると、街並みの維持管理は一層難しくなっていた。特に華人の移民が急増すると、彼らは路上で寝泊まりしたり、商売したりし、総督が望む統一的景観は崩れていった。¹⁵⁾

15) ハーンによれば、総督スウォル (Christoffel van Swoll) は華人によって建物の前につけ加えら

II 植民地都市の郊外住居

II-1 ラント・ハイス (Land-Huis)

バタヴィアの都市住居は短期滞在の会社職員は我慢できたとしても、植民地で富と名誉を手にした僅かな富裕階層はそうではなかった。バタヴィア建設からおおよそ40年たった1660年代、ニューホフは城外の様子を次のように書き記している。

城外には市民の多くはとても快適な庭園と邸宅を持っている。バタヴィア城外の大きな川の上流にはキャプテン・バーグス氏の屋敷があり、その周囲にはあらゆる種類のインド産の樹木が植えられ、インド式 (indisch) で建てられている。河畔にはすばらしい避暑用の家を持っている。城外にはもう一つすばらしい邸宅が建っている。それは前総督の下で働いていたストラントウィッチ氏の所有で、とても天井が高く、快適にできており、またファサードは美しく飾られ、さらにたくさんの種類の樹木が植えられ、よく手入れされた庭園がある。[Nieuhof 1682: 282]

チリウォン川を少し遡ったところはウェルテフレーテン (Weltevereden) と呼ばれた地区で、17世紀後半すでにいくつかの邸宅が建っていた。その建物をニューホフは「インド式 (indisch)」¹⁶⁾ であると述べているが、庭園がそうなのか、建物がそうなのか明らかではない。18世紀以前に建てられた住居については記述から推測するしかないが、それ以降建てられた建物についてはいくつか資料が残されている。一つは、第二次世界大戦直前バタヴィア博物館によって実施された歴史的建築の調査報告書がある [Wall 1943; 1952]。当時残っていた最古の一戸建て住宅建築の例は、1736年 F. J. コイエット (Frederik Julius Coyett) によって建てられた通称グヌン・サリ (Gunung Sari) 邸¹⁷⁾ (図2-1) で、T字型の平面をしているが、窓や屋根の形態などから全体として城内の街屋を一戸建てに独立させただけのものである。街屋との唯一の違いは正面玄関に設けられた列柱式ポーチコ¹⁸⁾で、雨露を避けて馬車に乗り降りでき

られる庇 (bovenstoep) が気に入らず、1717年にそれを禁止したが、1770年頃パラ (Petrus Albertus van der Parra) の総督の時代に再び許可されるようになったといわれる [Haan 1922: Vol. I, 467]。

16) インデッシュ (indisch) とは「インドの」や「インド風の」を意味するオランダ語で、ニューホフが生きていた17世紀後半には熱帯地方一帯を指し、西インドと東インドの区別はなかったようだ。

17) コイエットが現在のジャラン・グヌン・サハリ (Jalan Gunung Sahari) に建設した郊外邸宅で、後にクレンテン・センチオン (Klenteng Sentiong) という道教寺院に改修された [Wall 1943: 27-48]。

18) ポーチコ (portico) とは建物の玄関前に大きく突き出した部分を指し、日本語で車寄せと訳される。

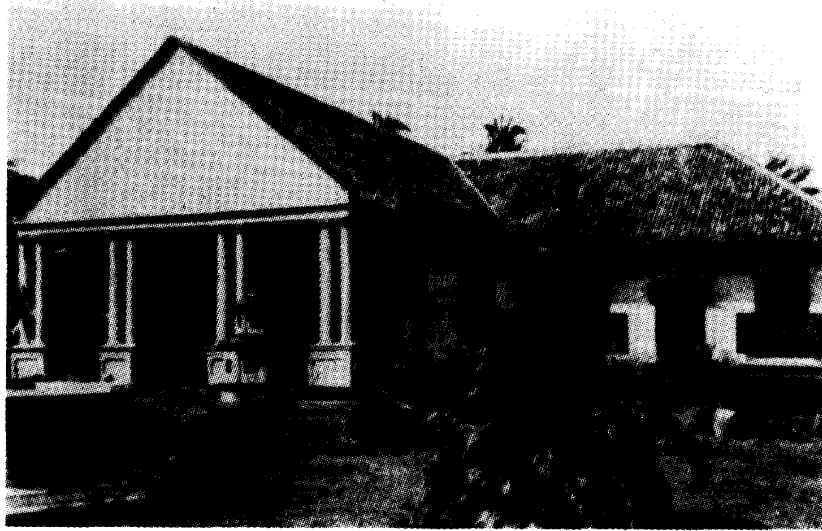


図2-1 バタヴィアのグヌン・サリ邸

出所: Haan [1922]



図2-2 バタヴィア郊外のバロック式ラントハイス

出所: Loos-Haaxman [1928]

るように作られたものであった。また、建物後方にも列柱式ポーチが設けられており、ヨーロッパ古典建築要素を借りて住居を熱帯居住に適合させようとしたことが窺える。しかし中央の大きな広間の存在は、生活の中心があくまで室内にあったことを示すものであり、ポーチコやポーチは出入りのための便宜でしかなかった。

18世紀後半の事例はJ. ラッハの図集に多数描かれている(図2-2)。これらすべての屋敷は

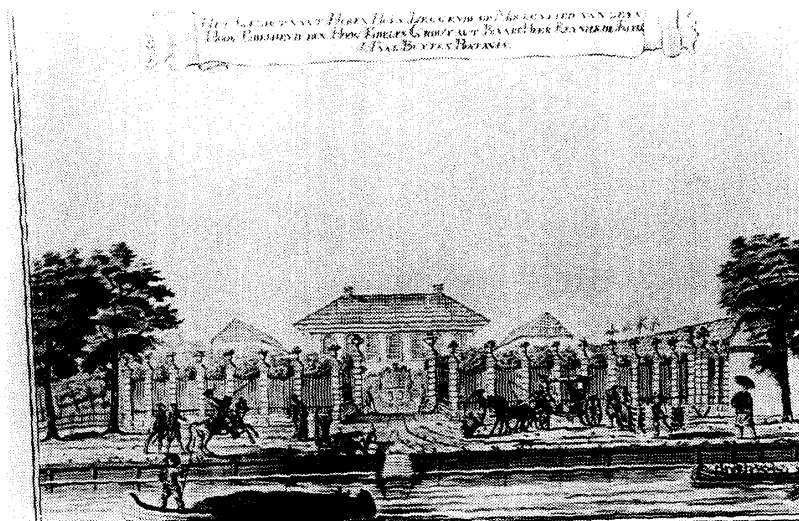


図2-3 バタヴィア郊外のクレルク邸

出所：Loos-Haaman [1928]

整形式庭園¹⁹⁾と両翼と主屋から構成されており、バロック様式が非常に好まれたことがわかる。それはヨーロッパで当時流行していた建築様式であり、富と名誉を顕示したいというバタヴィア富裕層の気分と合致するものだったのであろう。また、大きな樹木が植えられた庭園には散策する人たちの姿が必ず描かれており、社交の場となっていたことがわかる。総督であった P. A. パラ (Petrus Albertus van der Parra) 邸はその典型例であり、棟や破風や門柱の飾りは贅を尽くしたものであった。R. クレルク (Reinier de Klerk)²⁰⁾ 邸 (図2-3) は現在公文書館 (Arsp Nasional) となっている建物で、パラ邸に比べると装飾は少なかったが、屋敷の平面構成は同じであった。このように17世紀から18世紀にかけて建設された郊外住居は、庭園を通して外部へ目が開かれたが、まだ屋内と屋外の明確な境界があった。ニューホフが「インデッシュ式」と呼んだのは、おそらく本国では見ることのできない熱帯植物の植えられた庭園のことであったにちがいない。

II-2 カントリーハウス (Country House)

インドでは、1773年にイギリス政府が東インド会社の経営に参加してからカルカッタの本格

19) 16世紀以降のヨーロッパの庭園は整形式 (formal garden) と風景式 (landscape garden) に分けられ、前者は迷路を混ぜ合わせながら左右対称の幾何学的配置を行うのに対して、後者は池や丘を織りまぜながら不規則な配置に特徴がある。

20) クレルク (Reinier de Klerk) はこの邸宅の建設当時オランダ東インド会社の高級職員であったが、1777年には総督 (Governor-General) に任命されている [Wall 1943: 88]。

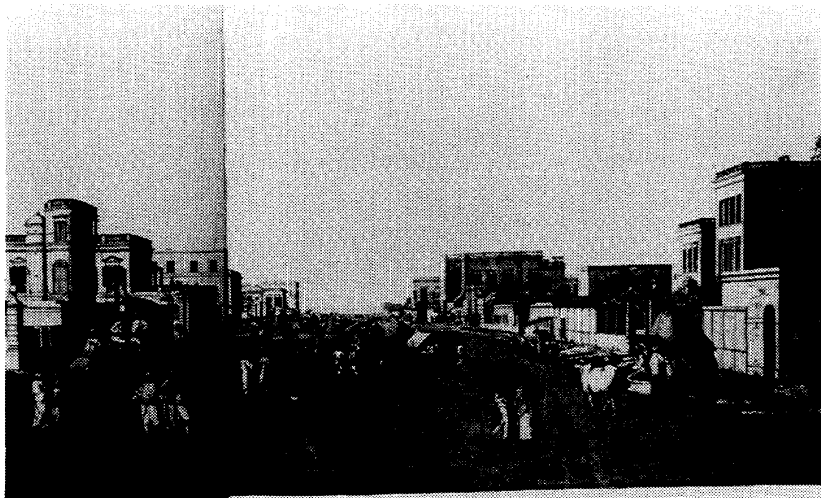


図2-4 18世紀末のカルカッタ中心部

出所: Losty [1990]

的建設事業が始まる。バタヴィアとの大きな違いはすでに周囲に大勢の現地住民がいたことで、はじめからイギリスにとっての植民地行政都市であった。そのため都市住宅を建設する必要はなく、イギリス人たちはもっぱら防御施設、行政施設、そして官使用住宅を整備すればよかった [飯塚 1983]。単身下級官吏のためのライターズビルディング (Writers' Building)²¹⁾を除くと、官使用住宅は階級によって大小の違いはあるものの基本的に一戸建てであった。そのため、ゴアやバタヴィアのような街並みは形成されることはなかった (図2-4)。

当時、イギリス本国ではバロック様式の一つであるパラディオ式²²⁾の隆盛期であり、郷紳や貴族が建築家を雇ってこの様式でカントリーハウスを建設していた。古代ローマ建築を手本にしたのでコロネード、ポーチコ、ページメント²³⁾などが際立ち、それまでの建築様式に比べると開放的で暑い気候に適合するものであった。イギリス東インド会社は、工務局長 (Surveyor General)²⁴⁾に本国の有名建築家を任命し、このパラディオ式でカルカッタの官庁建築や官使用住宅を建設していった (図2-5)。

21) ライターズビルディング (Writers' Building) はカルカッタ政庁の書記官の宿舍であった。

22) パラディオ (Andre Palladio) はルネッサンス期イタリアの建築家で、生前多数の建築を設計するとともに、自らの設計手法を集大成した『建築四書』(1570)を著した。開放的空間理論が特徴で、彼の没後ヨーロッパ各地に広まった。イギリスでは1720年頃からバーリントン伯爵 (Burlington) のお気に入りの建築様式となり、彼の影響を受けて上流階級の人々もこの様式でカントリーハウスを建設した。

23) ページメント (pagement) とは切妻屋根のかかった建物の側面で三角壁の部分を指し、たいていの場合その中に建物の象徴となる装飾がつけ加えられる。

24) Surveyor General 職は、英国王立工務局 (King's Office of Works) の最高技術職であり、軍事以外のさまざまな公共建設事業を指揮した。1773年にインド省が成立するとともにインド植民地でも任命され、大規模な建築については彼らが設計を行った [Colvin 1963]。

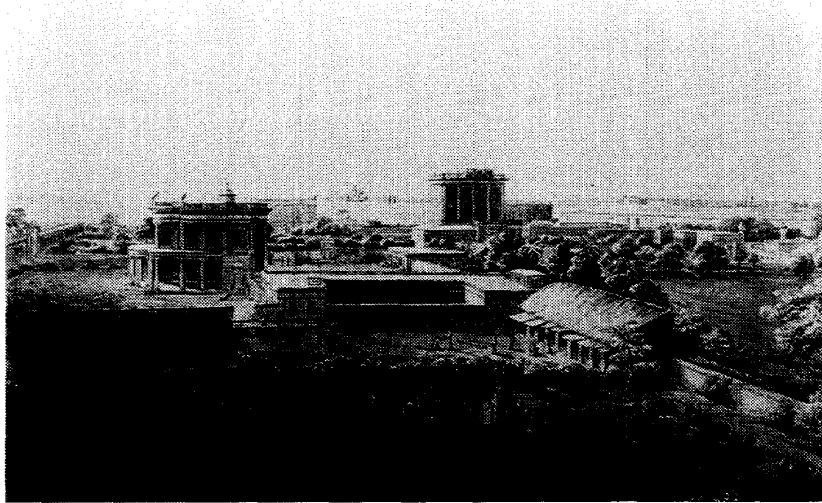


図 2-5 カルカッタのカントリーハウス

出所：Losty [1990]

オランダの植民地であれ、イギリスの植民地であれ、主要都市はヨーロッパと直接的に結ばれていたため、このように本国流行の様式が僅かな時間をおいて登場し、極端な形で実現していった。17世紀から18世紀にかけてバタヴィアで富と名誉を築いた人たちは競ってバロック様式の大邸宅を建設したし、また18世紀後半カルカッタでは大英帝国支配の威厳を示すためにパラディオ式で官公庁建築を飾っていった。両者の違いは18世紀末から19世紀にかけて顕在化し、オランダ人たちが庭造りに精を出している間、イギリス人たちはさらに古代ギリシャまで建築デザインの源泉を遡って、新古典様式²⁵⁾という次の建築様式を準備していた。

Ⅲ フロンティアと半屋外の生活空間

Ⅲ-1 インデッシュ様式とギャラリー

領土支配が行われるようになると、それまでヨーロッパ人の居住地が港湾域だけだったのが内陸にも開かれていった。その最も大きな目的になったのが農園と軍営地の開発であった。ジャワでは、すでに1760年代に画家ラッハがバイテンゾルフ (Buytenzorg, 現ボゴール) に建つ農園住居を描いている (図 3-1)。同じ頃、バタヴィア郊外ではバロック様式の建築が百花繚乱に咲き乱れていたのに対して、この高原の農園住宅は箱形軀体に寄せ棟屋根が載った単純な姿をしていた。全体的に軒が伸びているのが特徴で、特に農園側の軒下空間が広く、柱の間

25) 新古典様式 (Neo-Classicism) は、大きなページメントや太いドリス式円柱が特徴で、単純で力強い印象を与える。このような文化的動きは、海外領土を拡大しようという政治的動向とパラレルに進行しており、両者の間には強い関係があったと思われる。



図3-1 18世紀半ばのバイテンゾルフの農園住宅

出所: Loos-Haaman [1928]

にキャンパスの日除けが掛かっているが、これはそこが半屋外の居住空間になっていたことを示している。

18世紀後半は、バタヴィアからバイテンゾルフへの街道が整備され、その沿道に多数の農園や避暑地が開かれた時期であった。18世紀末チトラップ (Citrap) に総督が別邸を建設したが、これは初めから周囲に奥行きの高いギャラリーが巡らされていた [Wall 1943:118] (図3-2)。内部には厨房やトイレなどの部屋が配置されておらず、サービス機能は西側に設けられた付属屋が担っていたことが分かる。もう少しバタヴィア寄りでは、すでに建てられていた邸宅の周囲にギャラリーが増築されるようになった。ポンド・グデ (Pondok Gedeh)²⁶⁾ 邸 (図3-3) とチリリタン・ブサール (Cililitan Besar)²⁷⁾ 邸 (図3-4) はともに1770年代に二階建ての単純な箱形の建築として建てられたが、19世紀にかけて軒が長く伸ばされた。ギャラリーの屋根は傾斜が緩くなり、ジャワの伝統建築のプンドポ (pendopo)²⁸⁾ の屋根形態に似ているが、これはあくまで増築した結果生まれたものである。

26) ポンド・グデ (Pondok Gedeh) 邸は、J. ホイマン (Johannes Hooyman) によって1775年頃に郊外邸宅として建設された [Wall 1952: 60]。まるで小山のような建物で、ギャラリーの屋根を支える垂木が主屋から継ぎ足されていることから、ギャラリー全体が増築されたのは明らかである。1990年に確認したところ、ジャラン・ボゴール・ラヤ (Jalan Bogor Raya) 沿いに現存しており、現在陸軍が所有している。

27) チリリタン・ブサール (Cililitan Besar) 邸は、H.L. クラップ (Hendrik Laurens van der Crap) によって1775年に郊外邸宅として建設された [Wall 1952: 61]。この場合もギャラリーの垂木が新しく継ぎ足されており、後から付け加えられたものである。

28) プンドポ (pendopo) とはジャワの伝統的建築の一部分で、建物の正面部分に独立して設けられる、全周開放された建物。ボンネット型の屋根を持ち、接客などに用いられる。

泉田：アジア在住ヨーロッパ人の生活様式の変容

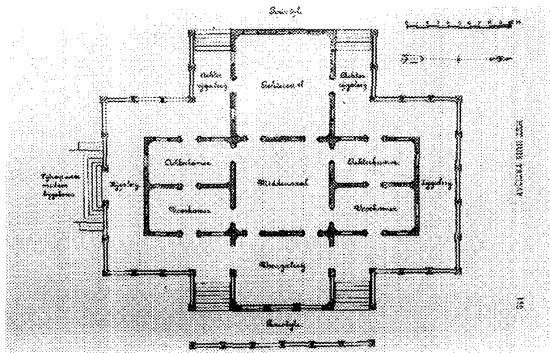
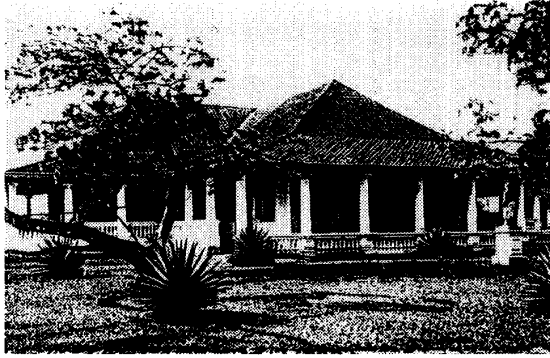


図3-2 チトラップの避暑用別荘
出所: Wall [1943]

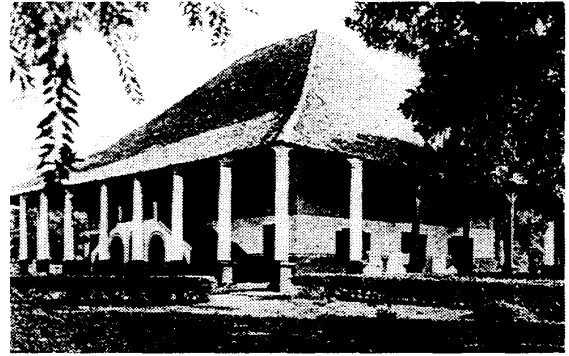


図3-3 ポンド・グデ邸
出所: Wall [1943]

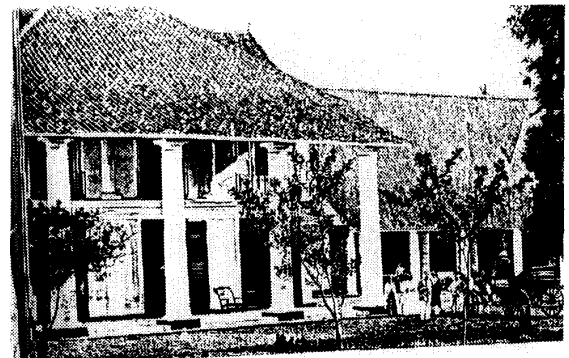


図3-4 チリリタン・ブサール邸
出所: Nijs [1961]



図3-5 『デンボ・ドゥル』に描かれた
インデッシュ的生活(1)
出所: Nijs [1961]

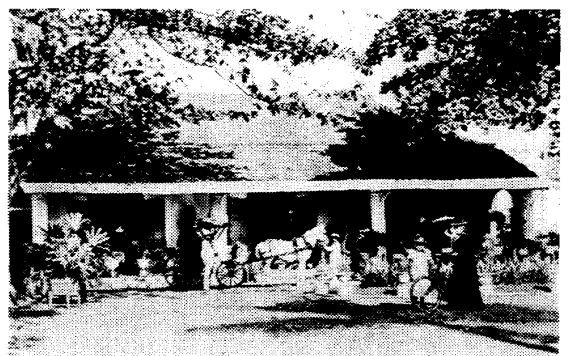


図3-6 『デンボ・ドゥル』に描かれた
インデッシュ的生活(2)
出所: Nijs [1961]

19世紀を通してギャラリーは、アジアに居住するヨーロッパ人の住宅にとって必須の部分になっていったようである。『テンポ・ドゥル (*Tempo Doeloe*, 古き良き時代)』[Nijs 1961] など、20世紀にかけて出版された写真集には必ずこの広いギャラリーや庭園の中でくつろぐオランダ人たちの生活が描かれている(図3-5, -6)。

以上のことをまとめておくと、第一に周囲にギャラリーの回った建築は初めは文化的中心であった都市部から離れた農園や避暑地などで成立しており、フロンティアの住宅形態であったといえる。第二に、ギャラリーは主屋の軒が延長されてできていったもので、そこははじめから半屋外の生活空間として使われたものと考えられる。そもそも熱帯モンスーン地帯で住む以上、熱と雨露が建物の壁を経て室内に伝わらないようにし、またそれらから建物を守るために軒を深くするということは伝統的住居によくみられることである。ここで重要なのは、18世紀末から19世紀にかけて、どうしてアジア在住ヨーロッパ人の半屋外の生活空間としてこれが出現したかということである。それを考える前に、同時代のインドにおけるイギリス人の住居の変化を見てみたい。

III-2 英領インドのバンガローとヴェランダ

オランダ領東インドの「インデッシュ」式住宅とギャラリーに対応して、英語にはバンガローとヴェランダという言葉がある。1886年に初版が出された『ホブソン&ジョブソン』[Yule and Burnell 1886] はバンガローを次のように説明している。

サンスクリット語あるいはヒンディー語が語源の言葉で、インド内部においてヨーロッパ人が生活している最も一般的な建物。一階建てで、ピラミッド型の屋根をしており、たいていのは茅葺きであるが、時として瓦葺きの場合もある。インドの軍営地内の武官の宿舎の多くもこのような特徴を持っている。[*idid.*]

インデッシュが「インド風の」という装飾語であったのに対して、バンガローは特定の形態の住宅を意味する名詞であった。しかし、本書が紹介している最も早い歴史的事例によれば、「ベンガル人権力の支配の下で、スンディップ(Sundip)に住んでいた少数のフランク人がサトガウン(Satogaunw)に商売にやってきた。彼らは河口の堤防の上に商品の売買のための建物をベンガル式(Bengali style)で建設した[1633年]」とあり、もともと「ベンガル風の」という形容詞だった可能性がある。ところが、17世紀末には、「便利な[フーグリ川]川岸近くに、東インド会社職員の居住のためバンガレもしくは小屋(bungale or hut)を建て[1676年]」、「インド洋を描いたオランダ人の海図にはカルカッタの表示はなく、代わりにフーグリ、商館、……、バンゲラー(Bangelaer)や楽しみみの建物(Speelhuys)という字が読める」というよう

に、現地の材料や構法で作られた軽微な建物を広くヨーロッパ人の中で意味するようになっていた。

具体的形態が分かるのは、1780年代末にインドを広範に旅行した W. ホッジスの次の記録である。

バンガロー (Bungalow) はインドの建物で、たいてい地上から 1, 2, 3 フィートの高さの煉瓦造の基壇の上に作られ、平屋建てである。部屋の配置は、食堂と居間は中央にあり、寝室は四隅に置かれる。全体が一つの大きな茅葺き屋根で覆われ、軒が低く伸び、この直角型に配置された空間はヴィランダー (virander) あるいは開放式ポーチコである。時として、ヴィランダーの角部は部屋として用いられる。[Hodges 1794: 146]

この建物の主要素は基壇の上に軒が深く伸びた四角形の大屋根の建物が載っていることで、屋根の付いた廊下を意味するヴィランダーという言葉といい、呼称は異なるもののインデッシュ式住宅と同じ形態であった。また、18世紀末に顕在化して、19世紀にかけて一般化したこともインデッシュと共通する。このバンガローについて、19世紀に入っていくつかの起源説が発表されたが、フロンティアで徐々に時間をかけて形成されたこのような文化形態に対して明確な答えを見付け出すのは難しい。起源説の一つは、カルカッタ周辺に居住していたイギリス人が建物の周囲に短い庇のついた現地建物をモデルにして、インド在住のイギリス人が自らの建物により長い庇を巡らしたというものである²⁹⁾ (図3-7)。第二は、内陸に駐留したイギリス軍人たちが軍用テントをしだいに木材と茅を用いて定住にふさわしい住居に改造していったというものである³⁰⁾ (図3-8)。

前二説がインド在住イギリス人たちが現地住居形態を部分的にモデルにしたと主張しているのに対し、第三の説はあくまでイギリス人たちが考案したと結論する。しかし、現地で最も入手しやすい資源(材料、構法技術、労働力)を最大限利用しながら、自らの生活要求に合うように建物を改良したという点は、前二者の説明原理と一致している。これはインデッシュ式住居の起源の説明とも共通し、既述のようにオランダ人たちは軒先に垂木を延長し、ラントハイ

29) ニルソンは、古絵図の中に庇が周囲に回った二重屋根の建物を見だし、イギリス人がこれを最初自らの主屋のモデルにし、ついで屋根と庇を一体化した大屋根式を工夫したと述べている [Nilson 1968: 186]。

30) キプリングは、「インドにおける初期ヨーロッパ人居住者は軍事、統治行政、貿易の活動に従事し、一年の大部分をテントの中で過ごした。当時、ベンガルにはこの要求に適した土着的建築がなかったので、彼らはよく使い慣れていたインド用テントをモデルにして作り上げた」[Kipling 1911]と述べているが、仮設的構造物であるテントの形態を構造と材料が異なるにもかかわらず維持したとは考えにくい。



図3-7 カルカッタ近郊の庇付き民家

出所: King [1984]



図3-8 デリー駐在のイギリス軍のテント

出所: Archer [1980]

セン式住宅の周囲にギャラリーを巡らしたと考えられる。技術的には、四角形平面の建物は最も作りやすく、また雨や風に対して少し勾配のきつい方形や寄棟の屋根が最も有利である。また日本の縁側のように伝統的建築によく見られる軒や庇は、特に熱帯・亜熱帯では炎熱で外壁が直接焼けないようにする工夫であるが、ほぼ全周に奥行き深い軒や庇が回り、そこで生活の一部が展開されるようになったということはアジア在住のヨーロッパ人の生活様式が変化しただけと考えられない。新しい生活様式は、まず農園や軍営地など植民地都市から離れたフロ



図3-9 バンガローの事例

出所：King [1984]

ンティアの居住地で顕在化し、それに対応して軒あるいは庇が伸ばされるようになり、ジャワではインデッシュ、インドではバンガローと呼ばれる住宅形態に定型化、一般化したのであろう（図3-9）。しかし、具体的に新しく生じた生活の要求とは一体どのようなものであったのか、ヨーロッパ人の同時代の文献資料から直接知るのには難しい。

IV ま と め

ここではこれまでのヨーロッパ人の居住環境の変化を振り返りながら、19世紀に入ってから住居に関して著された記述や図像に、上の疑問に対する解答のヒントを探し出してみよう。そもそもヨーロッパ人たちがアジアに進出してきたのは貿易が目的だったため、まず最初は海岸域に居住地を築いた。居住地を外敵から守ることは武力でできたが、より厄介な問題は病気から逃れてどのように健康的に暮らすか、また単調な生活からの気晴らしをどのようにするかであった。前述したように、ゴアのポルトガル人たちは裏庭に面したヴェランダで奴隷に風を送ってもらい午後の数時間を過ごし、時には輿に揺られて郊外の庭園や水場に行楽にでかけた。またバタヴィア城内のオランダ人たちは、海風に当たると病気になると信じ、日中は窓を閉め切って暮らし、しばしばチリウォン川を遡って舟遊びをすることもあった。すでに16世紀後半の時点では清涼な水場や丘陵地で過ごすことが健康に良く、また気晴らしにもなることは知られていた。しかし、貿易主導時代の生活圏は主に単身者が住む港湾とその周辺の居住地に限られていた。

このような生活様式が多大な死亡者を出しながらも18世紀後半まで続けられていたが、こ



図4-3 ヴェランダからサービスする使用人
出所: Bastin [1979]

候が大きく異なり、私の病気も少しは良い方向に向かうであろう」[Archer and Bastin 1978: 20] と述べている。郊外の清涼な空気に触れながら庭を眺め、あるいは庭を散策することが健康的で、かつ気晴らしになると信じられていたのであれば、屋外でも屋内でもない空間を演出する装置が作り出されたとして不思議ではない。

第二のヒントは、すでに16世紀のゴアで見られたように、熱帯アジア在住のヨーロッパ人住宅では一般的に多数の奴隷や使用人が使役されていたことで(図4-1)、これらの人が日常生活のさまざまな雑務を担い主人家族の快適さを作り出していた。まだギャラリーがないラントハイセン式住宅の平面を見ると、多くは中央玄関を入ると後方まで伸びた玄関ホールがあり、その左右にそれぞれ寝室が配置されていた(図2-2)。そしてこの主屋の後方に、厨房、貯蔵庫、廊、そして使用人居室などのためのいくつかのサービス棟があった。このような配置では、使用人たちが主屋各室への用事のために移動するとき、必ず中央ホールを通らなければならず、そこで主人家族や客人と交錯することになったはずである。イギリス本国で18世紀後半に主人家族と使用人の空間分化が起きたといわれるが[Forty 1989: 83]、そうであれば、より多くの使用人を抱えた植民地ではもっと明確な空間分化があったとしてもおかしくない。ギャラリーやヴェランダを外周全部に回せば、使用人が日射を避けまた雨に濡れず常時屋外からサービスすることが可能になる。事実19世紀の絵画ではほとんどいつも使用人たちはギャラリー

あるいはヴェランダにいる姿が描かれていた(図4-2, -3)。

このようにして、半屋外のギャラリーやヴェランダでテーブルと椅子を出し、庭を眺めながら紅茶を飲むという、まことに植民地的住宅像が完成していったと考えられる。

参 考 文 献

- Archer, M. 1980. *Early Views of India*. London: Thames and Hudson.
- Archer, M.; and Bastin, J. 1978. *View of Singapore from the Sea (Raffles Letter to His Sister): The Raffles Drawing in India Office Library*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- パロス. 1980. 『アジア史 I, II』東京: 岩波書店.
- Bastin, J.; and Brommer, B. 1979. *Nineteenth Century Prints and Illustrated Books Indonesia*. Antwerpen: Het Spectrum.
- Breuning, H. A. 1981. *Het voormalige Batavia*. Utrecht: GJB.
- Cameron, J. 1865. *Our Tropical Possessions in Malayan India*. London: Smith, Elder and Co.
- Colvin, H. M. 1963. *The History of the King's Works*. London: Her Majesty's Stationary.
- Danvers, F. C. 1988. *The Portuguese in India: Being a History of the Rise and Decline of Their Eastern Empire*. New Delhi: Asian Educational Services.
- Forty, A. 1989. *Objects of Desire: Design and Society 1750-1980*. London: Thames & Hudson.
- Greig, D. 1987. *The Reluctant Colonists*. Assen/Maastricht: Van Gorcum.
- Haan, F. de. 1922. *Oud Batavia*. 3 vols. Batavia: G. Kolff and Co.
- Hodges, W. 1794. *Travels in India during the Years 1780, '81, '82 and '83*. London.
- 飯塚キヨ. 1983. 『植民都市の空間構成』東京: 大明堂.
- King, D. A. 1984. *Bungalow: A Production of a Global Culture*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Kipling, J. L. 1911. *The Origin of the Bungalow*. Country Life in America (XIX).
- Lancaster, C. 1985. *American Bungalow 1880-1930*. New York: Abbeville Press.
- リンスホーテン. 1968. 『東方案内記』東京: 岩波書店.
- Loos-Haaxman, J. de. 1928. *Johannes Rach en Zijn Werk*. Batavia: G. Kolff & Co.
- Milone, P. D. 1966. Queen City of the East. Ph. D. Dissertation, University of California, Berkeley.
- _____. 1985. Allocated or Entitled Housing. In *The Rise and Growth of the Colonial Port Cities in Asia*, edited by D. K. Basu. Lanham: University Press of America.
- 永積 昭. 1982. 『オランダ東インド会社』東京: 近藤出版社.
- Navaarrete, D. F. 1732. *An Account of the Empire of China in Collection of Voyages and Travels*, Vol. I. London.
- Nieuhof, J. 1682. *Travels and Voyages to the East Indies*. London: Oxford University Press. (reprinted 1988)
- Nijs, E. B. de. 1961. *Tempo Doeloe Fotografische Documenten uit het Oude Indie 1870-1914*. Amsterdam.
- Nilson, S. 1968. *European Architecture in India*. London: Faber & Faber.
- Orange, J. 1924. *The Chater Collection: Pictures Relating to China, Hong Kong, Macao, 1650-1860 with Historical and Descriptive Letterpress*. London: Thornton Butterworth.
- Topografische Inrichting. 1924. *Indie in Woord en Beeld (Pictorial Netherlands East-Indies)*. Weltevreden: Ontwerp.
- 内田青蔵. 1992. 『アメリカ屋住宅物語』東京: 住まいの図書館.
- Wall, V. I. V. 1943. *Oude Hollandsche Buitenplaatsen van Batavia*. Wageningen: Veenman & Zonen.
- _____. 1952. *Oude Hollandsche Bouwkunst in Indonesie*. Antwerpen: De Sikkell.
- Yule, H.; and Burnell, A. C. 1886. *Hobson-Jobson: A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words, and Phrases, and of Kindred Terms, Ethnological, Historical, Geographical, and Discursive*. Reprint, Calcutta: Bengal Chamber Edition, 1990.